

Title	大阪大学文学部国文学研究室蔵 後鳥羽院御集（翻刻）五（完結）
Author(s)	山本, 一; 佐藤, 明浩
Citation	語文. 1988, 50, p. 40-47
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68779">https://hdl.handle.net/11094/68779</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学文学部国文学研究室蔵

後鳥羽院御集 (翻刻) 五

山本 一・佐藤明浩

建保元年十二月十四日御会水無瀬殿当座

冬月

雑言

一九二 わすれめや雲のかよひち立かへり乙女の袖を月にみし哉

一九三 みなせ川むすはぬ水につらゝゐて月にそ冬のそては霑ける

一九四 天の戸ををし明かたの冬の月水はをのかひかり也けり

一九五 時しもあれ太山の月は音もせておもひそふかき雪の浅茅生

新新忘衣たつ面影そへたて行月はその夜にめぐりあへとも

(「行分空白」) 63オ

同二年二月御会

春風

一九六 おさめけんふるきにかへるかせならは花ちるとてもいとほき  
らまし

春雨

一九七 大かたの木め春雨ふるたひに松さへみればいろまさりゆく  
山花

新新千  
一九八 よしの山くもるに見ゆる滝の糸のたえぬや花のさかりなるら  
ん

(「行分空白」)

同八月撰歌合

秋十首 「63ウ」

一九二九 はつお花たか手枕にゆふ霧のまかきもちかくうつら鳴也

統統撰家隆勝  
一九三〇 しきしまや高円山のあきかせにくまなきみねをいつる月影

玉秀能勝  
一九三二 明石かた浦路晴行あさなきに霧にこきいつるあまのつり舟

統統通光勝  
一九三三 中中に風も音せぬ夕くれのみやまの秋は心すみけり

新新家家隆勝  
一九三三 木からしのすゝ吹みねの夕しくれそめぬ色しも身にはしみけ

僧僧正勝  
一九三四 山ふかく秋のあはれを尋いれは猶なかつきの晨明の月

秀秀能勝  
一九三五 にしの海のかりのこの世の浪の上に何やとらん秋のよの月

秀秀能持  
一九三六 ありきつゝ来つゝもとはんから衣たつたの山のおくの秋かせ

一九三七 物思ふ秋の夕への露よりや袖にそ月のやとりそめけん

一九三八 いかにせんまつちの山のをみなへし人もとはねは露にしほれ

ぬぬイ  
つ「64オ」

同九月三日当座二首

暁山

一九三九 おもひ入色は木のはにあらはれてふかき山路の有明の月

夜恋

一九四〇 よひくにおもひやいつるいつみなるしのたのむりの露の木  
からし

同九月十四日

月契多秋

一九四一 契あれは秋もかはらし久かたのあまてる月のすまん限りは

(一行分空白)

同三年六月二日御歌合」64ウ

春山朝

一九四二 春のたつ霞の光ほのくと空に明行あまのかく山

夕早苗

一九四三 さなへとる山田のあせにせく水のにこるにもすむ夕月夜哉

行路秋

一九四四 わけゆけはその色となきみやま木も秋は身にしむ風の音哉

暁時雨

一九四五 かたしきの衣にさむく時雨つゝ有明の山にかゝる村雲

松経年

一九四六 かたそきのゆきあひの霜のいくかへり契を結ふ住吉の松」65オ

(一行分空白)

同四年八月廿日五首御熊野詣路次当座和歌湯浅宿

春山花

一九四七 契りけり神のはしめの山さくらさそふをかせの手向とや思ふ

夏山夕

一九四八 かた山のむらのかやり火霞つゝ春みし色の夕月夜哉

秋山月

一九四九 おなし秋のたか里にまつ詠むらん高き峯より出る月影

冬山暁」65ウ

一九五〇 をはつせやみねの木からし夜もすから吹あけ空の雪の山のは

一九五一 なにとなく旅ねの袖もぬれぬへし山の南のまつかせの声

(一行分空白)

同十月十一日庚申嵯峨殿

山家落葉

一九五二 嵐山我身よにふるなめしはなに匂ひの庭の紅葉ゝ

(一行分空白)

同五年四月十四日庚申御会

春夜

一九五三 をのつからよるちる色もみるはかり月の比まてみよしのゝ

花」66オ

夏暁

一九五四 夏の夜は更行かねのたゆむより暁こめてあくる山の端

秋朝

一九五五 たちならす紅葉の山の朝露にあげはしほると鹿や鳴らん

冬夕

一九五六 雪つもるときは木はらふ夕暮のあらしもしろくなひく山哉

久恋

一九五七 としも経ぬわか名もみなと立波にみるめよるてふ浦風もかな

(一行分空白)

同七年三月八日御会水無瀬殿」66ウ

松契春

一九五八をのか色も契や春にふかみとり葉かへぬ松の風のまに〜  
撰歌合嘉禄二年四月廿一日家隆卿賜之  
判進云々

一番

左初春

一九五九 谷風に山のしつくもとけにけりけふより春も立やしぬらん  
右おなし

一九六〇 うちなひき石まの水も氷とけゆきもなやまぬ春の山河

左谷風と侍より句ことのつゝきまことにとゝこほるところなくめつらしくこと葉は」67\*ふるきさまたけありて秀逸のすかたかきりなくみえ侍にや春のたちぬることろもいかてむかしよりよみのこし侍けん右またえんにやさしくおもひわきかたくはみえ侍れとも左なを上下の句のをはりもいますこし句ひ有てみえ侍れはしづくにぬるゝ春たちまさるとも申侍へきにや

二番

左鷲」67

一九六一 うくひすのなく音を春にたくへつゝかへりて花をさそふ春哉

右落花

一九六二 をはつせややまとはわかむ吹にはふ風のうへ行花の白雲

左彼かせのたよりにたくへてそといへるうたをひきかへてはなをさそふ春かな心詞おもしろくおもひよりかたく侍へし右吹にはふかせのうへ行花のしら雲又ことにたけありて花の匂ひまことに遠く思ひやられ侍れはなそらへて秀逸の持と申侍るへし」68\*

三番

左暮春

一九六三 芳野川せかはや春のやすらはんおられぬ水の花のうたかた  
右おなし

一九六四 さほ姫の春のわかれの涙とや露さへかゝるきしの藤浪

せかはや春のとて末におられぬ水の花のうたかた心ことはめつらしくありかたく侍にやさほ姫の春のわかれの涙きしの藤なみにもをきそふらん心もやさしくすてかたく侍れと猶歌のたけよしの」68川せきとめかたく侍へし

四番

左曉時鳥

一九六五 過ぬるかあり明のみねの郭公物おもふとていとひやはせん

右海辺霧

一九六六 新編難波かた磯辺の波の音すみて夕霧よする秋の塩風

まつ夏と秋との歌はともによろしきにとりてもあきの歌はまさる事にて侍れと有明のみねの郭公はものおもふともなと心すかた又いかに侍るへしとも」69\*おほえ侍らす夏山にとをけるはなを何となくなへて景気もすくなく侍けんかし夕きりよする秋の塩かせ又いかに物にまけかたくみえ侍る持と申へきにや

五番

左月

一九六七 月影もうき身からとやかこつらん人をはわかぬ袖の涙に

右萩

一九六八 故郷のもとあらの小萩いく秋があるしよそなる花にほふら

九」69

この番又心詞とりく〜にいつれをいかにと申わきかたく  
侍り人をはわかぬと侍心ふかくいひしりてまことにあり  
かたくきこえ侍へしまたあるしよそなる花にはふらんこ  
とはをかさり心をもとめたる様にてこれひとつのすかた  
にて侍うへにこそその秋ころあくかれ侍しまゝにふるき玉  
のみきりをとをくたつねまいりて侍しかは花の色露もか  
はらす思ひいてられ」70\* 侍れはをとるとも申かたく侍  
へし

六番

左雁

一九六九はつかりのつらきすまるの夕しをもをのれなきつゝ泪とふら

ん

右雨後月

一九七〇久堅の空も涙もかきあへぬ月かけぬらす秋の村雨

初かりのつらきすまるとつゝきたるすかた詞まことにた  
くみにきこえ侍うへにをのれなききて涙とふらんと一句に  
あたる詞なく哀に聞え侍に月影」70\* ぬらす秋の村雨又  
めつらしくえんにありかたくみえ侍れはわきかたく侍へ  
し

七番

左 山時雨

一九七一露時雨もる山かけのうす紅葉下草かけて秋そかれ行

右 菊

一九七二なからへてみるはうけれとしら菊のはなれかたきは此世也け

下草かけてかれ行らんもる山のあきのしくれ三室の山に  
も色まさり侍にや」71\* 但みるはうけれと白菊のとては  
なれかたきなとを心詞すかたきくの露もすてに袖にうつ  
ろひてかきりなくなしくきこえ侍れはをしてまさると  
申侍るなり

八番

左海辺時雨

一九七三わたつうみの波の花をは染かねて八十島遠く雲そしくるゝ

右雑

一九七四さらてたに老は涙もたえぬ身にまたて時雨と物思ふ比」71\*  
波の花をはそめかねてやそしまとをくしくるらん雲心詞

たけかきりなく秀逸にこそ侍めれまた老は涙のたえぬ身  
にまたて時雨とものおもふころこれは愚老か心の中あひ  
かよひて時雨袖をあらそひ侍れは尤可為侍也

九番

左恋

一九七五人はよもかゝる涙の袖きりはあらし身のならひにそつれなかるら

ん

右侍恋」72\*

一九七六うつゝにはたのめぬ人の面影に名のみはふかぬ庭の松風  
人はよもかゝる涙のつらき身のならひにつれなかるらん  
誠にあはれにをよひかたく見え侍ほとにたのめぬ人の面  
影に名のみはふかぬといへる心もふかくなをありかたく  
みえ侍れは

十番

左法文

一九七七 をしなへてむなしき空のうすみとりまよへはふかき四方のうき雲

右おなし 72ワ

一九七八 新統 袖のうへにあたに結びし白露やうらなる玉のしるへなるらん

左右の法文いかにも心をよひかたく被注付ふかきさとりも猶まよひ侍ぬれとまよへはふかき四方のむら雲末句すこしまさると申侍へきにや大かたはかくえらひつかはれ侍にける秀逸ともはみしかき心いよくをよひかたくてわきまへ申やられす侍れとさのみ持とのみ付侍らんも恐思給故にせうく注申一向さらに不可被 73オ 用之事也皆以異様其上卒爾之間撰定僻事多敷事宜物不過兩三也其中法文歌雖無指事若得其意者為出離至要也

左歌心者

法性之空念来清浄なれとも妄想の雲おほひぬれば正囚仏性ありともしらすこのことほりをしらは仏になる事かたし即一微塵のうちに 73ウ 法界ことくおさまる況や卅一字間に実相のことほりきはまれり

右歌心者

或一切諸法悉是仏法性イといひ或一色一香無非中道と釈すれば霜露のあたなるおもひも色にめて香にふけるも皆是仏法しかしなから中道理也しかれば袖のうへの露をみてこのおもひをなさは衣のうらの玉たちまらにあらはるへき因縁也

印本是迄有 74オ

建仁元年九月十三夜 影供御歌合

近野秋雨

一九七九 荻の葉に風もろともに雨すきて野へのかりいほをしか鳴也

遠山暮風

一九八〇 秋の夜の月みつ空の暮かたにみつ雲はらふ山のはの風ま敷

寄池恋

一九八一 空の雲まちこし夜半をへたてにて月たにすます庭の池水

詩歌合

(一行分空白)

水郷春望 74ウ

一九八二 新古 見渡せば山本かすむみなせ河夕は秋となにおもひけん

朝霞

嘉禎二年七月遠島御歌合

山桜

一九八三 統古 しほかまの浦のひかたの曙にかすみに残る浮島のまつ

郭公

一九八四 人心うつりはてぬる花の色に昔なからの山のはもうし

萩露 75オ

一九八五 新拾 さのみやは心あるへき時鳥ねさめの空に一こゑもかな

夜鹿

一九八六 下葉には色なる玉やくたくらん風のすしき萩の上の露

時雨

一九八七 久かたのかつらの影にたつ鹿は光をかけて声そさやけき

忍恋

一九八八 物おもへはしらぬ山路にいらね共うき身にそふは時雨也けり

一九八九 手をたゆみをそふる袖も色に出ぬまれなる夢の契り斗に

久恋

一九九〇 よとよにもみたれてみゆる山鳥のおろのなかおの長きつらさ

よ

山家」75ウ

一九九一 軒は荒てたれかみなせの宿の月すみこしまゝの色やさひしき

霧旅

一九九二 数ならぬみしまかくれに年をへてしほたれわふとはゝこた

へよ

(一行分空白)

建仁元年十月熊野御幸路次にて旅の心を

一九九三 <sup>新古</sup> 見るまゝに山風あらく時雨めり都も今は夜さむなるらん

(一行分空白)

同十月九日藤代王子にて

野径月明」76オ

一九九四 月に行のへの道まうら枯て霜に成ゆく冬のところ哉

曉初雪

一九九五 柴の戸を朝あけの空初鳥雪のはるはしらむよこ雲の山

霧中間波

一九九六 一夜ぬるはまのとまやの袖枕なれぬになるゝ磯の波哉

(一行分空白)

同十一月切目王子にて

河辺落葉

一九九七 いはた川こすゑは冬にうつれとも浪にそしはし秋は残れる

旅宿冬月」76ウ

一九九八 分捨るいくへの雲は跡もなしみねのかりねは月そすみける

(一行分空白)

同十三日稻葉根王子

浜月似雪

一九九九 忘れては雪かと思ふ冬の夜の月すむ浦の有明の浜

嶺月照松

二〇〇〇 冬のよのみねたちはなれ行月の秋にも似たる松の風哉

(一行分空白)

同十四日滝尻王子

遠近落葉」77オ

二〇〇一 紅葉ふくをちの嵐やかよふらん庭にうつろふ秋の一むら

暮聞河波

二〇〇二 熊野川夕なみたかく行水のはやくもまちし今日もきにけり

(一行分空白)

同十六日発心門

寺落葉

二〇〇三 樺つむこけの通路跡もなし峯のあらしの木葉吹比

深山嵐

二〇〇四 又たくひなちの。山にすむ月のきよき光に松かせそふく

滝間月」77ウ

二〇〇五 吹まよふみ山のあらし空はれて月にさえたる滝の音哉

(一行分空白)

同十七日檀井王子

深山紅葉

二〇〇六 うは玉のよるの錦をたつた姫誰み山木と独そむらん

海辺冬月

二〇七 浦さむく八十島かけてよる浪を吹上の月に松風そふく

(一行分空白)

同十九日那智山

冬野風」78才

二〇八 深草や野寺のあらし身にしてみて暮行空に秋をやとせる

朝寒声

二〇九 難波江やよるみつ塩の程みえて芦のかれはに残る朝霜

遠島雪

二一〇 あはち島浪もてゆへる波間より雪は光の在明の月

熊野の本宮やけてとしの内に遷宮侍しに

二〇一 契りあれは嬉しきかゝるおりにあひぬ忘るな神も行末の空

くまのゝ道にてよませ給ける

二〇二 岩にすむ苔ふみならず三熊野の山のかひある行末もかな」78才

二〇三 熊野河くたすはやみのみなれ棹さすか見なれぬ浪の通路

(一行分空白)

正治二年十一月八日影供御歌合

暮山雪

二〇四 冬こもり春にしられぬ玉なれや芳野のおくの雪の夕暮

一とせ忍ひて大内の花ゑいらん侍りしに庭に散て侍し花

二〇五 けふたにも庭をさかりとうつる花さえすはありとも雪かとも

新古  
見よ」79才

御かへし

二〇六 さそはれぬ人のためとや残りけんあすよりさきの花の白雪

二〇七 君かくて山のはふかくすまみせは独うき世に物や思はん

続後

十月はかりみなせより同人のもとへぬれて時雨のなと仰

つかはされて次のとしの神無月に無常の歌あまたよませ

給ひてつかはし侍し中に

二〇八 思ひ出るおりたく柴の夕煙むせふも嬉し忘かたみに」79才

新古

御返し

二〇九 おもひ出るおりたく柴と聞からにたくひしられぬ夕煙哉

同

建仁三年定家朝臣中将の事申すとて父の入道よみてたて

まつりし

二一〇 小篠原風まつ露のさえやらてこの一ふしを思ひをく哉

新古

御返し

二〇二 小さゝ原かはらぬ色の一ふしも風待露にえやはつれなき

その比老の病せめていかならんと聞えし程なりつかさめ

しの比にも侍らさりしかはとかくの御返事もなかりけ」

80才 るとかや程へてつかさめしあるへしなときこえしに

むすめの申おとろかさされたりけるにかくなんおほん返事

あり

為家いとおさなくてはしめてまいりしを御前にめし入て

賜ける

二〇三 住吉の神も哀と家の風なをも吹こせ和かのうら浪

続後

建永元年八月十五夜鳥羽殿に御幸ありて御遊などありけ

る月の夜和歌所ののこともまいりけるよしきこしめし

て」80才 いたさせたまふける

二〇三 古も心のまゝにみし月の跡をたつぬ秋の池水



日吉社五十首中

二〇四 芳野山さくらにかゝる夕霞花もおほろの色はありけり

大神宮百首中

二〇五 霞さへ猶ことうらに立にけり我身のかたは春もつれなし

建保四年百首中

二〇六 をのつからふるきに帰る色しあれば花そめ衣露や分まし

百首御歌中

二〇七 春風に幾重の水今朝とけてよせぬにかへる志賀の浦浪」81オ

二〇八 しのゝめとちきりて咲る朝かほに誰帰るさの涙をくらん

二〇九 木の葉ちる生田の杜の初時雨秋より後を問人もかな

二一〇 ひこ星のかさしの玉や天川水かけ草の露にまかはん

題しらす

二一一 うしと見る夢より後の心をもうつゝなからにいかてかたらん

二一二 哀しる人は問こて山里の花にたふくあた夜のみ

二一三 小山田の庵もるかひの夕煙むせふ思ひをやるかたそなき

二一四 秋の露や袂にいたくむすふらんなきよ。あかすやとる月哉

二一五 露は袖に物思ふ比はさそなをくかならず秋のならひならねと

二一六 たのめすは人をまつちの山なりとねなまし物をいさよひの

二一七 よと共にくゆるもくるしなにてたてゝあはての浦のあまのもし

は火

二一八 ふしのねの月に嵐やはらふらん神たにけたぬ煙なれとも

二一九 いつまでかなかき夜からとかこちけん老のね覺とおりをわく

哉

二〇四 冬山の雪吹しほる木枯にかたもさためぬ曉のかね

二〇四 一夜をさむみねやのふすまのさゆるにもわらやの風を思こそや

二〇四 色かはる柞の梢いかならんいはたのをのに時雨ふる也

二〇四 何か思ふ何かはなけくさめやらぬ夢のうちなる夢のうきよを

二〇四 吉野河桜なかれし岩間よりうつれはかはる山吹の花

二〇四 蛙なくあかたのゑとに春かれて散やしぬらん山吹の花

二〇四 けふは又雲の浪より出にけりきのふの暮の山のはの月」82オ

二〇四 七 たつね入かへさはをくれ時鳥誰ゆへくらす山路とかしる

(一行分空百)

正治二年九月御歌合おなし心を

二〇四 八 時鳥いつちいく田の杜ならん声のなこりを雲に残して

題しらす

二〇四 九 夏山ののならのはそよき吹風に入日涼しきひろしの声

二〇五 〇 夕立のはれ行嶺の木のまより入日すゝしき露の玉篠

二〇五 一 夏山のしげみにはへるあをつゝらくるしや浮世我身ひとつに

二〇五 二 夏入かたのうき身は時もわかねとも夕暮つらき秋風そ吹

二〇五 三 秋風や塩瀬の波に立ぬらん声のはそよく夕暮の空」82ウ

二〇五 四 石見かた高津の山に雲晴てひれふる峯を出る月かけ

(九行分空百)

(後表紙見返し左上二「誦合畢」、同左下二「墨付八十三枚」ト墨書)

○第一回(第四十五輯)の訂正。\*書誌二行目「銀泥」を「雲母押」。\*歌五七「と」は第四句「の」のすぐ左傍。

—金沢大学助教授・本学大学院博士前期—